一 動物病院における兎疾病の発生状況

斉藤 久美子^{1)†}長谷川 篤彦²⁾

1) 斉藤動物病院 (〒336-0907 浦和市道祖土3-17-2)

2) 日本大学生物資源科学部 (〒252-8510 藤沢市亀井野1866)

(1999年7月21日受付・2000年8月23日受理)

要 約

1997年1月～1998年12月の間に動物病院に来院した兎の疾病発生状況について調査した。その結果、診療件数は増加傾向を示し、疾病発生時の平均年齢は減少傾向を、そして平均体重は減少傾向を示した。雌雄比は54.7:45.3と雄が雌をやや上回っていた。疾病を8群に分け集計したところ、発生頻度は皮膚疾患、消化器疾患、歯科疾患、眼科疾患、泌尿生殖器疾患、筋骨格系疾患、呼吸器疾患、神経系疾患の順であった。特に皮膚疾患、消化器疾患、歯科疾患はいずれも20～22%と高い発生頻度を示した。犬や猫の調査結果と比較すると、大きな差異がみられたが、これは兎の病原体に対する感受性や生理学のおよび解剖学的特徴が関与しているものと推察された。臨床の立場から、兎において発生頻度の高い疾病群に関する研究は今後特に重要であると考えられた。

——キーワード：動物病院，疾病，発生頻度，兎。

----- 日獣会誌 54, 199～203 (2001)

動物病院における兎の診療に関しては疑問点が多い一方で、それに対する学問的裏付けのある情報は比較的少ない。伴侶動物としての兎の疾病について研究し、診療技術を向上させることは今後の課題として重要であると思われる。そこで、現在の疾病の発生状況やその推移を把握することが不可欠であると思われることから、今回著者らは一動物病院におけるものではあるが、兎の疾病発生状況について検討した。

材 料 お よ び 方 法

1997年1月～1998年12月までの2年間に斉藤動物病院(埼玉県浦和市)に来院した兎の疾病について調査した。疾病数の把握にあたっては、個々の疾病の初回来院時を1回に数えることとし、同一疾病が再発した場合、新たな疾病の発生とみなすか否かは以下の基準により症例ごとに判断した。すなわち、疾病はいったん完治し、必要と思われる再発予防対策を行っていても再発がみられた場合は新たな疾病として数え、一度略治したものの見かけだけの治癒であり完治していなかったと考えられる再発、あるいは再発予防不可能な素因に基づく再発は新しい疾病として数えなかった。また、併発する疾病がある場合に複数の疾病として扱うか否かは個々の症例ごとに検討して判断した。この場合の基準は、併発する疾病が病因論的に独立していれば1疾病として取り上げ、

主要疾病と関連して二次的に生じたものであれば1疾病としては扱わないこととした。

診断名については診断が必ずしも確定していなくても、臨床的根拠の明らかなものは診断された疾病として扱った。なお、診断名のつけられない症例については、下痢、食欲低下、跛行などの症状名をもって暫定的に分類した。

分類項目は兎の疾病に関する書籍[3, 4, 6, 7]を参考に、臨床的経験を加味して、皮膚疾患、消化器疾患、歯科疾患、眼科疾患、泌尿生殖器疾患、筋骨格系疾患、呼吸器疾患、神経系疾患の8疾病群および‘その他’とした。

顎膿瘍および眼窩膿瘍は器官系別分類の原則からすれば骨の疾患および眼の疾患であるが、これらの大多数は菌根の感染に起因していると考えられるので、便宜上歯科疾患に含めた。去勢手術、健康診断など来院理由が疾病ではない例は‘その他’に含めた。

調査にあたり、疾病発生の背景要因として、性別、年齢、体重についても集計した。

成 績

件数：調査対象とした兎の頭数、疾病数および1頭当たりの疾病数は表1のとおりであった。兎の来院頭数は1997年の159頭に対し1998年には243頭と増加しており、1頭当たりの疾病数は1.39から1.49と1997年より

† 連絡責任者：斉藤久美子(斉藤動物病院)

〒336-0907 浦和市道祖土3-17-2

☎048-885-5982 FAX 048-887-5918

一動物病院における兎疾病の発生状況

図1 一動物病院における兎疾病の疾病群別発生頻度 (1997年および1998年)

図2 雄および雌における疾病群別症例数 (1997年と1998年の合計)

表1 一動物病院での兎疾病に関する各年の調査値

年	頭数	疾病数	1頭当たりの 疾病数	平均 月齢	平均 体重 (kg)	6カ月以 上の平均 体重(kg)
1997	159	221	1.39	30.1	1.92	2.14
1998	243	362	1.49	27.4	1.86	2.04

1998年の方がわずかに多かった。

調査対象の大半は家庭で飼育されている兎であり、両年を通算して学校からの依頼は1.0%，ペットショップからの依頼は0.2%であった。なお、1998年来院した総数は873件であり、1998年の1疾病当たりの診察回数は平均2.4回であった。

性別：年間疾病件数における性別では、雄（去勢雄を

含む）の比率は1997年には54.6%，1998年には54.7%で両年とも雄が雌を上回っていた。

平均年齢：疾病発生時の平均月齢を表1に示した。1997年には平均30.1カ月齢、1998年には27.4カ月齢で、t検定により有意差がみられた ($P < 0.05$)。

平均体重：疾病発生時の平均体重を年別に表1に示した。1998年の平均体重（1.86kg）は1997年（1.92kg）より減少していた。成長期の子兎は平均体重を引き下げるので、両年の比較のため生後6カ月未満を除いた体重の平均値を算出したところ、これも1997年（2.14kg）より1998年（2.04kg）の方が低値であり、両年の間にt検定により有意差が認められた ($P < 0.05$)。

疾病群別発生頻度：疾病群別の発生頻度を年別に百分比で比較した結果を図1に示した。両年ともに皮膚疾

表2 各 疾 病 の 両 年 通 算 し た 症 例 数

皮膚疾患		歯科疾患		筋骨格系疾患	
皮膚糸状菌症	19	白歯過長症	52	骨 折	11
足皮膚炎（潰瘍）	18	切歯過長症	41	跛 行	8
“湿性”皮膚炎	14	顎 膿 瘍	16	脱 臼	3
外 傷	14	眼窩膿瘍	7	開 張 肢	2
慢性皮膚炎	14	合 計	117	打 撲	1
ツメダニ症	10	眼科疾患		起立不能	2
表在性膿皮症	10			合 計	27
皮下膿瘍	5			呼吸器疾患	
抜 毛	4			スナッフル	19
外 耳 炎	4			肺 炎	2
皮膚腫瘍	3			胸腔内腫瘍または胸水	1
ハエウジ症	2			肺 水 腫	1
深在性膿皮症	2			合 計	23
ノミ寄生	2			神経系疾患	
粘液腫	1			斜 頸	12
肝 不 全	1			神経障害	10
合 計	120			顔面神経麻痺	1
		合 計	66	合 計	23
消化器疾患		泌尿生殖器疾患		そ の 他	
盲腸便秘	34	子宮内膜症	6	爪 きり	19
下 痢	28	腎 不 全	6	去 勢	13
胃毛球症	24	血 尿	3	健康診断	10
鼓 脹 症	16	膀胱結石	2	食欲低下	5
蟻 虫 症	5	乳 腺 炎	2	妊娠鑑定	1
コクシジウム症	5	膀 胱 炎	2	問題行動	1
胃 穿 孔	2	難 産	1	心 肥 大	1
粘性性腸症	2	悪 露	1	乳 糜 胸	1
脱 肛	1	妊娠中毒	1	熱 射 病	1
口腔内異物	1	包皮水腫	1	多臓器不全	1
出血性腸炎	1	子宮腺癌	1	赤 色 尿	1
肝 不 全	1	子宮膿瘍	1	前額洞蓄膿	1
合 計	120	子宮水腫	1	合 計	55
		偽 妊 娠	1		
		合 計	28		

患，消化器疾患，歯科疾患が20％前後であり，次いで眼科疾患が多かった．また，両年通算した疾病群別症例数を図2に示し，同図に疾病群別の雌雄比率を示した．雌雄比に特徴がみられたのは歯科疾患と泌尿生殖器疾患であった．

疾病発生頻度の詳細：各疾病群内の各疾病における両年通算した症例数を表2に示した．なお，疾病の分類基準についてわかりにくいものを取り上げて表3に示した．症例数が最も多いのは白歯過長症（52例）であり，次いで切歯過長症（41例），盲腸便秘（34例）であった．

考 察

来院頭数は1997年より1998年で大幅に増加していた（表1）．一動物病院の資料が全体の傾向を示しているとはいいきれないが，近年，兎の症例報告が増加していることから [1, 8, 9]，兎の診療件数は全般に増加傾向

にあるものと考えられる．そして飼い主の診療への要望に動物病院が対応していくことができれば今後もこの傾向は持続すると思われる．

性別では雄の数が雌を上回った（雄：雌 = 54.7 : 45.3）が，これはおそらく有病率の差ではなく，飼育比率を反映するものであると思われた．

疾病発生時（初診時）の平均体重は1997年より1998年の方が低くなっていた．体重の大小には成長，肥満度，品種の3つの要素が関与すると思われる．6カ月未満のものを除外しても有意な減少（ $P < 0.05$ ）がみられたことから肥満度と品種とがこの減少に関与している可能性がある．今回は肥満度についての調査は行わなかったが，肥満の兎の減少や消瘦した兎の増加などの傾向は実感されないことから，これは小型品種化の傾向を反映しているものと推察された．

表1に示したように，疾病発生時（初診時）の月齢の

表3 疾病の診断基準

足皮膚炎（潰瘍）	足底から飛節にみられる皮膚の炎症、潰瘍、膿瘍
‘湿性’皮膚炎	皮膚からの分泌を伴う持続性細菌性皮膚炎
慢性皮膚炎	原因の特定できなかった慢性皮膚炎
抜毛	他の個体による攻撃抜毛および自己抜毛
盲腸便秘	粘液性腸症の範ちゅうに入らない盲腸のうっ滞
コクシジウム症	症状の有無にかかわらずオーシストが検出されたもの
粘液性腸症	排便中もしくは剖検時の結腸に特徴的粘液が存在したもの
肝不全	肝酵素値の著しい上昇があり肝不全症状のみられたもの
臼歯過長症	臼歯に過長が認められ処置を要したもの
顎膿瘍	歯根の膿瘍が始まると考えられる上下顎の膿瘍
結膜炎	結膜に炎症所見のみられるもの
涙囊炎または鼻涙管狭窄	鼻涙管洗浄により涙囊内の蓄膿や鼻涙管の狭窄がみられたもの
角膜障害	角膜の糜爛、潰瘍、穿孔など
血尿	原因の特定できなかった尿への血液混入
悪露	産後に悪露が多く、その原因が特定できなかったもの
偽妊娠	偽妊娠症状のみが主訴であったもの
跛行	原因の特定できなかった跛行
打撲	打撲による跛行で整形外科的異常の認められなかったもの
起立不能	栄養失調と思われるが原因が特定できなかった起立不能
スナッフ	くしゃみと鼻汁を主徴とする鼻炎
胸腔内腫瘍または胸水	X線で胸水の存在が確認され腫瘍の存在も強く疑われたが原因や病態が特定できなかったもの
斜頸	多くは細菌性内耳炎と考えられるが臨床病理学的に診断できなかったもの
神経障害	原因や病変部位の特定できなかった神経障害
爪きり	来院目的が爪きりのみだったもの
健康診断	健康診断を目的に来院し特に疾病が発見されなかったもの
食欲低下	原因が特定できなかった食欲低下

平均値は1998年が1997年より2.7カ月低かった。高齢の兎の来院が増加する一方で、それ以上に飼育し始めたばかりの幼若齢の兎の来院が多くなったことが、疾病発生時の平均月齢を引き下げた要因であると思われる。

疾病群別の発生頻度は図1に示した通りで、上位4群は両年とも順位が変わらず、皮膚疾患、消化器疾患、歯科疾患、眼科疾患の順であった。また、下位4群（呼吸器疾患、泌尿生殖器疾患、筋骨格系疾患、神経系疾患）は両年で大きく順位が変動したが、これは症例数が少ないためであると思われる。

図2において、性差が最も顕著な疾病群は泌尿生殖器疾患であり、これは雌性生殖器疾患および妊娠・出産に関連するもののためであった。泌尿生殖器疾患は28件（4.8%）であるが、これを雌のみに限ると4位の眼科疾患の件数に近く、発生頻度は比較的高率であった。次いで、歯科疾患（雄65%、雌35%）で性差がみられたが、その理由は不明であった。

症例数の最も多かった疾病は臼歯過長症（52件）であり、切歯過長症（41件）がこれに次いでいた。切歯過長症と臼歯過長症とが併発していたものは9例であった。すなわち、臼歯過長症例の17%に切歯過長症が、切歯過長症例の22%に臼歯過長症が存在した。このような併発症例は一方が他方を誘発するためであるほかに、その個体ごとの歯質の問題や常生菌の磨耗に影響す

る食餌の問題が関連していると思われる [1, 2]。

臼歯過長症、切歯過長症に次いで多かったのは盲腸便秘（34件）、下痢（28件）、胃毛球症（24件）と、いずれも消化器疾患であった。これらは飼育管理の問題が関与していると思われる症例が多く、飼育管理指導、特に食餌管理についての指導が重要であり [2]、そのためには食餌と消化器疾患との関係についてさらに究明することが必要であると思われる。

動物により病原体感受性は異なり、病原性微生物や寄生虫による疾患は動物ごとに特徴がみられる。兎の感染性疾患ではウイルス性疾患が非常に少なく、今回の集計ではウイルス性と考えられる症例は1件もなかった。また寄生虫（ツメダニ、ハエウジ、ノミ、蟻虫、コクシジウム）は4.1%で、他の伴侶動物に比べて比較的少ないと思われる。消化管寄生虫も消化器疾患中8.3%（10件）で、他の伴侶動物に比べ少ないものと推測された。一方、細菌による疾患は非常に多く、細菌に起因すると考えられる疾患は足皮膚炎（足底皮膚炎および足底潰瘍）、湿性皮膚炎、表在性膿皮症、皮下膿瘍、深在性膿皮症、外耳炎、出血性腸炎、顎膿瘍、眼窩膿瘍、結膜炎、眼脂および流涙、眼瞼炎、乳腺炎、膀胱炎、スナッフ、肺炎、斜頸で約30%であった。これらの原因菌としてパスツレラが高率に分離された。パスツレラは犬や猫などでは口腔内に常在しており、病害をもたらすことはほと

んどないが、兎では非常に有害な化膿菌となる。皮膚糸状菌症は皮膚疾患中で最も多く、皮膚疾患全体の16%を占め、その頻度は犬よりも高かった [5]。

疾病の発生頻度はその動物の生理的および解剖学的特性に関連しているものと思われる。疾病の発生に関与すると思われる生理学的特徴としては、完全草食性動物であるため消化生理が肉食系の動物とは大きく異なることがあげられ [3, 6, 7]、これが消化器疾患の多発および多発疾病の種類に関係していると考えられた。また繁殖周期のない多産動物であるという繁殖生理の違いも [3, 4]、子宮の内膜症、水腫、腫瘍など雌性生殖器における疾病発生の特徴に関係しているものと思われた。

疾病発生に関与する可能性のある解剖学的な特徴としては、後腸発酵をいとなむ大きな盲腸を有すること、および嘔吐のできない胃の構造などがあげられ [4, 7]、歯科疾患に関しては、切歯、臼歯ともに常生歯であることが関与しているものと思われた [3, 4, 6, 7]。また、骨が非常に軽量にできていることが筋骨格系疾患の発生に関与している可能性も考えられた [3, 6]。

また、飼育管理失宜が原因の一部となっている疾病が多く、飼育管理は疾病発生の頻度に大きくかかわっていると思われるので、飼育管理と疾病との関係、特に食餌と疾病発生との関係に注目していくことも重要であると思われた [2]。

今回は一動物病院における調査であり、動物病院全体の状況を把握しているとはいえないが、概略の傾向を知ることができ、兎の疾病発生についていくつかの特徴を見いだすことができた。兎の疾病発生の特異性が病原体感受性や生理学的・解剖学的特徴にどのように関係して

いるかという問題は、個々に今後の課題としていきたい。そして、皮膚疾患、次いで消化器疾患、歯科疾患、眼科疾患が多く、また雌に限れば泌尿生殖器疾患が多いことから、これら疾病群に早急に対応するための研究が必要があるものと考えられた。また、疾病発生状況については今回の結果をふまえて、より長期的かつ広範囲の調査を行いたいと思う。

引用文献

- [1] 網本昭輝, 八村寿恵, 野口道修, 鈴木敏之, 中野正司, 奥田綾子: 動物臨床医学, 6 (4), 35-40 (1998)
- [2] Carpenter JW, Kolmstetter CM: Feeding Small Exotic Mammals; Small Animal Clinical Nutrition, 4th ed, Hand MS, et al eds, 947-952, Mark Morris Institute, Kansas (2000)
- [3] Harkness JE, Wagner JE: The Biology and Medicine of Rabbits and Rodents, 4th ed, 143-150, Williams & Wilkins, Baltimore (1995)
- [4] Jenkins RJ, Deeb BJ, Paul-Murphy J, Hillyer EV, Gentz EJ, Carpenter JW: Ferrets Rabbits and Rodents Clinical Medicine and Surgery, Hillyer EV, et al eds, 169-239, WB Saunders, Philadelphia (1997)
- [5] 永田雅彦, 酒井健夫: 日獣会誌, 52, 775-779 (1999)
- [6] Okerman L: Diseases of Domestic Rabbits, 2nd ed, 48-120, Blackwell Scientific Publications, Oxford (1994)
- [7] Quesenberry KE: Saunders Manual of Small Animal Practice, Birchard SJ, et al eds, 1349-1362, WB Saunders, Philadelphia (1994)
- [8] 秦 有紀, 澤嶋裕子, 澤嶋 効: 日獣会誌, 51, 599-601 (1998)
- [9] 谷 健二, 林屋早苗, 田浦保穂: 日獣会誌, 52, 243-245 (1999)

Incidence of Rabbit Diseases at an Animal Hospital

Kumiko SAITO[†] and Atsuhiko HASEGAWA

Saito Animal Hospital, 3-17-2 Saido, Urawa 336-0907, Japan

SUMMARY

An investigation of the incidence of rabbit diseases among clinical cases at an animal hospital in Urawa, Saitama Prefecture from January 1997 to December 1998 showed that, during those 2 years, numbers of cases increased while average age at disease onset and average body weight decreased. The ratio of male to female rabbits affected was 54.7 : 45.3. Diseases were divided into 8 groups: dermatological, gastrointestinal, dental, ophthalmic, urogenital, musculoskeletal, respiratory, and neurological (listed in order of frequency). Dermatological, gastrointestinal, and dental diseases all showed high incidence of 20~22%. The great discrepancies between these results and diseases incidences in dogs and cats may be related to differences in sensitivity to microbes and to characteristic rabbit physiological and anatomical features. Prevention and treatment require further study of the diseases with high incidence rates.

—Key words : animal hospital, disease, incidence, rabbit.

[†] Correspondence to : Kumiko SAITO (Saito Animal Hospital)

3-17-2 Saido, Urawa 336-0907, Japan TEL 048-885-5982 FAX 048-887-5918

J. Jpn. Vet. Med. Assoc., 54, 199~203 (2001)